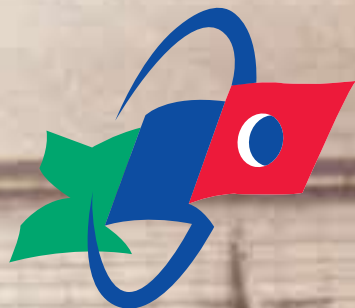




OTAKE

No.1059

11

2005.NOV

戦後60周年企画②

私たちのまちに
戦争の歴史があった。

昭和36年6月、長い間駐留軍の管轄下にあった東栄の元海兵団練兵場跡の接収地が返還された。直後、約6万5千坪の跡地に平和産業としての企業が進出し、大竹は発展を遂げてきた。しかし、この地に戦争の歴史があったという記憶は、次第に薄れてきている。戦後60周年を機に、戦時下の大竹、戦後の大竹を振り返り、今の時代に伝えたい。

返還式で「解放の鍵」が手渡された。

主な内容

私たちのまちに戦争の歴史があった。…	2
満足度・重要度アンケート調査結果・	
広島県知事選挙……………	14
秋イベント満載……………	16
学校選択を希望する方……………	19
育児一年生のお母さんへ……………	21
情報ステーション……………	25

9月27日、3人の方が大竹の地を訪れた。西尾妙子さん（69歳

大阪府守口市）と、その家族だ。叔父にあたる山口壽三郎さんの形見の品々を携えての訪問だった。

兵庫県丹波篠山出身の山口さんは、昭和17年1月、大竹海兵団に入団した。3カ月の訓練期間を経て、航空機の整備兵として小松島、知多と転属し、大分県の宇佐で終戦を迎えた。

戦後、郷里へと向かう途中、広島駅で米軍の検門があったという。海軍で支給されていた大きな布製の袋に、当時の写真や物品を忍ばせていた山口さんは、没収されないように袋を隠し、出発直前に取りに行き、列車に飛び乗った。

た。こうして持ち帰ったものは、長い間大切に保存されていた。

戦後は、パン職人として働いてきた山口さんは、平成2年にその生涯を終えた。そしてそれらの品々は、子どものいなかった山口さんのめいの妙子さんに引き継がれた。

戦

後60周年を迎えた今年の夏、新聞に載った海兵団資料募集の記事に妙子さんは引きつけられた。見出しの「大竹」の文字が目飛び込み、思わず連絡先の生涯学習課に電話をかけていたという。

生涯学習課で遺品の数々を前に山口さんから聞いたという思い出話を語る妙子さん。その一つ一つに込められた

生きてるときに連れて来たかった。 思い出の地を訪ねる巡礼の旅。

戦時の記憶



「偶然記事を見たとき、遺品をここに納めなさいということだと思いました」と運命的なものを感じた妙子さんだった。

生涯 生涯学習課の案内で、東栄の工場敷地内にある海兵団跡の記念碑を訪ねた。夕日を浴びた碑の前に、3人は静かに手を合わせる。そして碑に刻まれた海兵団のシンボルを見上げ、「桜に錨と、よ

う言うてたなあ」とぼつりともらす。

「今日出るときに、遺品を届けてくると仏壇に言うてきました。帰ったら報告します。でも生きてるときに連れて来たかったなあ。きっと泣かほったと思います」。そう目を潤ませる妙子さん。

戦後60年、若き日々を過ごしたこの大竹の地に、山口さんの思い出が刻み込まれた品々が帰って来た日だった。



(上) 叔父が被っていた海軍の制帽を手にし、思いを巡らせる妙子さん。
(左) 貴重な品々を忍ばせて持ち帰った布袋。



埋め立て工事が進む東栄沖、堤防から数メートル離れた海上に廃屋がある。水面に映る姿が、さざ波にゆらめいている。

戦時中、潜水艦乗組員を養成する機関である潜水学校が大竹の地に設けられた。海上に浮かぶこの建物は、スクリー音などを聴き分ける訓練をした探知講堂であった。60年の風雪に耐えてきた建物の屋根は草むし、壁は朽ち果てている。

日米との開戦を境に大竹は海軍の町へと変ぼうした。この地にできた海軍施設に全国から多くの人々がやって来て、町はにぎわい軍事色に染まった。

昭和20年8月6日には、大竹から広島市に建物疎開の動員で赴いた千人の人々が被爆した。

そして戦後、外地からの引き揚げ者を受け入れる港として、41万人の人々が足跡を残していった。

終戦から60年を迎えた今年、これらの記憶を記録にとどめる動きが起った。やがて埋め立て工事により、探知講堂も姿を消していく運命となっている。孤高の存在に映るこの建物は、無言で私たちに何を伝えようとしているのだろうか。

大竹の戦争の歴史を振り返り、今に伝えようとする人の姿を通して、平和の意味を考えたい。

(取材 秘書課)

戦後60周年企画②

私たちのまちに
戦争の歴史があった。

海兵団・潜水学校の歩み

大竹海兵団年表

昭和14年6月17日
呉海軍建築部長から大竹町長に対し軍用地の買収依頼
昭和15年2月
兵舎の建築に着手
昭和15年12月
呉海兵団大竹分団として3個分隊（約750人）の新兵教育が行われる
昭和15年
呉海軍施設部大竹出張所が小島新開に設置される
昭和15年10月〜昭和17年5月
軍用住宅200戸が大竹町郷水、油見地区に完成
昭和16年11月20日
大竹海兵団発足
昭和17年1月7日
大竹海兵団竣工式
昭和17年1月15日
第1回入団式挙行
昭和19年10月1日
海軍兵学校大竹分校設置
昭和20年5月15日
大楠機関学校大竹分校設置



大竹潜水学校年表

大正9年
呉に海軍潜水学校設置
昭和14年6月
新興人絹糸に対し、同工場地先約2万坪（約1万坪は潮遊地）の分譲を申し入れ
昭和17年3月
兵舎の一部が完成し呉からの移転開始
昭和17年4月15日
海軍潜水学校大竹分校設置
昭和17年11月23日
大竹分校が本校に昇格
昭和17年11月
残余の兵員の移転終了
昭和18年6月8日
開校式挙行
昭和18年
大竹警備隊本部が大竹地区保安のため潜水学校に組織される
昭和18年8月〜9月
ドイツ潜水艦乗員との共同訓練
昭和20年4月
周辺海域で呂号潜水艦機雷に触れ沈没

空から見る軍事施設跡

戦後米軍が撮影した空からの写真を見ると、海兵団や潜水学校は当時の姿をほぼとどめている。烹炊所や格納庫は、工場敷地内に現存している。

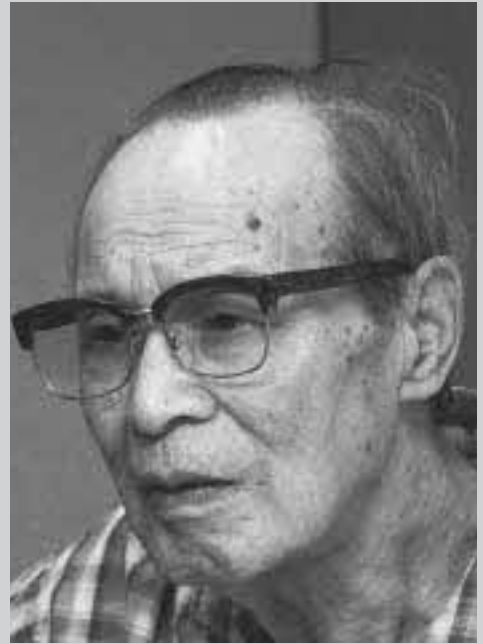
- | | |
|----------------------------|---------------|
| 1 潜水学校（戦後は国立病院） | 7 練兵場 |
| 2 潜水学校探知講堂 | 8 引き揚げ桟橋 |
| 3 海兵団本館・兵舎 | 9 機関学校 |
| 4 海兵団跡記念碑（現三井デュポン・ポリケミカル内） | 10 大竹駅 |
| 5 烹炊（ぼうすい）所・糧食倉庫 | 11 海軍青木住宅 |
| 6 格納庫 | 12 海軍冲山住宅 |
| | 13 陸軍燃料廠（しょう） |



（米軍撮影空中写真 昭和22年撮影）

海軍がつくった町の基盤。 そして記念碑に 刻まれた歴史。

海兵団の存在を今にとどめる。



海兵団から軍艦の勤務を経て、海軍の経理学校に進み、食糧管理の仕事をしていた山元さん。戦後は大竹に移転し海軍病院から組織が変わった国立病院で残務整理にも携わった。記念碑建設には事務局長として寝食を忘れ取り組んだ。

戦時の記憶



海

兵団とは、主に新兵に基礎教育をする機関で、平時は6カ月、

戦時は3カ月の訓練を受ける。大竹海兵団は、日米開戦を前に小島新開の広大な敷地に設けられた。当初は3千人規模であったが、ピーク時には7、8千人、関係者を含めると1万人を数えたといわれる。また、隣接する大竹潜水学校と合わせると2万人近い人がいたのではないかと思われる。これは当時の大竹町の人口よりも多いというから、まさに海軍の町の様相を呈していた。

また、こうした海軍施設のために水道も敷設された。今も市民に水を供給している防鹿水源は、海軍が建設したものだ。整備された施設は戦後、引き揚げ港や国立病院としての役割を担うことになり、一時期中学校や高校としても利用された。その後この敷地に大規模な工場が誘致され、新たな大

海

兵団に入団したのは、延べ15万3千972人といわれる。わずか4年余りの期間にこれだけの人間がこの地で過ごしたことになる。そうした歴史を後世に伝えようと、平成3年11月、大竹海兵団創設50周年に記念碑は建立された。記念碑建立に尽力した山元豊吉さん（80歳 本町2）も昭和17年、海兵団で教育を受けた。

竹の歴史を形づくっていくことになる。

全国2千200人近い方から寄せられた浄財と3年近くの歳月をかけ建設にこぎつけた。こうして三井デュポン・ポリケミカル敷地内、かつての海兵団正門付近に記念碑は完成した。そして除幕式は、5000人も列席者の中、盛大に挙行された。

山元さんは「大竹に海兵団があったということ。ここから何万人もの人が戦地に赴いたことを知ってほしい」と静かに言葉を結ぶ。



(上)ずらりと建ち並んだ海兵団兵舎。
(中)海兵団で使用した教科書。【安芸高田市 谷元進さん提供】(右下)油見の沖山住宅付近(推定)から顕徳寺方面を望む。
(左下)現在も残る煮炊所の建物は、三井化学の事務所・食堂・倉庫として使われている。(左)海兵団での食事風景。



「戦艦大和の最後」
坪井平次 著
三重県出身の著者が体験した大竹海兵団の訓練生活がつつられている。



戦

後、海外からの日本人引き揚げ者を受け入れるため、大竹港が上陸港に指定された。昭和20年12月、海兵団跡地を利用して地方引揚援護局が設けられ、翌21年1月に宇品引揚援護局大竹出張所となった。幸い海兵団や潜水学校施設は、比較的良好であったため、多くの引き揚げ者を受け入れる条件を満たしていた。異なども一時期引き揚げ港に指定されていたが、米軍が多数投下していた機雷のため、安全を期して大竹になったという。

大竹港に着いた引き揚げ船は、援護局に記録が残っている昭和20年11月21



復員兵は誰に敬礼しているのだろうか。写っている人や光景は変わったが後方に見える玖波・小方方面の山並みの姿は今も変わらない。

日から昭和21年12月3日までの間、219隻に及ぶ。最も多い21年3月には、41隻もの船が入港している。多いときには、1日数隻が停泊していることもあった。

戦前、戦後は豪華客船、戦時中は病院船として活躍した『氷川丸』も6月16日に入港している。

引

き揚げ者数の内訳は、陸軍20万1千720人、海軍5万7千35人、一般15万2千28人となっている。

大竹は主に南方からの引き揚げ者が多く、特に台湾からは、半数近い18万2千人が上陸した。また、一般人に限ると、台湾に次いで満州から2万2千人が引き揚げて来ている。

映画監督の小津安二郎も大竹に引き揚げ、帰りの列車の窓から尾道の風景に接したが、後の名作『東京物語』に尾道の場面が登場する構想につながっていたのかもしれない。

つらい外地での暮らしや引き揚げ船内での発病。望郷の思いを胸に、力尽きた人も少なくない。大竹で茶毘に付され無念の帰国となった人もいる。

秋風が吹くころには、次第に入港する船も減り、一時期千人余りいた職員も整理された。昭和22年になると入港してくる船もなく、2月末をもって援護局大竹出張所は役目を終える。しかしここで祖国の大地を踏みしめた感動は、一人ひとりの心に深く刻まれ、終生忘れることはなかっただろう。



(左) 検疫官の腕章。海兵団の砲台訓練用の建物は、検疫所として利用された。(下) 引き揚げ収容施設は、海兵団兵舎が使われた。中庭でカメラをじっと見つめる引き揚げて来た少女たちとベレー帽姿のニュージーランド兵。

(下左) 本土から沖縄や鹿児島などに帰る1,127人もここから出発した。





(上)上陸したら「歓迎」の門をくぐって検疫所へと向かう。
(下)栈橋には駐留の英連邦軍(ニュージーランド兵)が待っている。背後に宮島が望める。

戦後は大竹から始まった。

410,783人、第一歩をしるす。

終戦。人々は長い戦争の日々から解放され、力強く再出発を誓った。そして海外に残った660万人の在留の軍人・軍属と一般在留邦人は、一刻も早い帰国を願っていた。引き揚げ業務を行う厚生省は、大竹港を上陸港に指定。1年余りの期間に、41万人もの引き揚げ者が、ここ大竹の地からその一歩を踏み出した。



引き揚げの記憶

藤山一郎の歌声に 日本の平和を感じた。

昭和 和21年2月26日から翌22年2月
末までの1年間、中本智幸さん

(81歳 白石1) は、引揚援護局で働
き、多くの引き揚げ者たちを迎えた。

中本さんは、昭和21年2月21日、台湾
の基隆を出港し、24日に鹿児島に上陸
した。25日に大竹に帰り、さっそく翌
日から援護局の業務部援護課庶務係で
働くことになった。

始めは文書整理などの仕事をしてい
たが、頻繁に引き揚げ船がやって来る
ため、引き揚げ者たちの世話にまわっ
た。

上陸する人々にねぎらいの声をかけ、
「オーストラリア兵は、銃剣を持って
いますが、心配ありません」と安心す
るよう呼びかけていた。検疫所でもD



検疫所内の様子。DDTが散布
されている。中央奥には、中本
さんの姿もある。

DT噴霧に不安そうな表情を見せる人
に「大丈夫」と言いながら、消毒の手
伝いをしていた。そして中には、やっ
との思いで祖国の地を踏んだにもか
わらず、行くあての無い人々も数多く
いたという。そういう人に「どうした
らいいでしょうか」と相談されること
もあったそうだ。

そ

んな中で思い出に残る出来事が
あった。歌手の藤山一郎が南方

から帰還してきたときのことだ。昭和
21年7月26日の昼のひととき、援護局
庁舎の玄関内で歌声が披露され、職員
一同の心を和ませてくれた。鈴なりの
人だかりの中、自らアコーディオンを
弾きながら『花咲き花散る宵も 銀座
の柳の下で』と『東京ラブソディー』
など20曲くらいを歌ってくれたと、中
本さんは思い返す。藤山一郎の明るい
歌声を耳にした中本さんは「日本も平
和になったんだ」と実感したという。

夏が過ぎ、引き揚げ船のピークも越
え、翌年2月末に援護局大竹出張所は
閉鎖となった。最後まで勤めた中本さ
んの脳裏に「これで終わったんだ」と
の思いがよぎった。そのとき安堵とも
寂しさとも言えぬものが交錯したに違
いない。



**フィルムに残された
60年前の自分の姿。**

沖

に停泊している船から上陸艇に
乗り換えて接岸した桟橋から次々
と上陸する引き揚げ者。その中でカウ
ボーイ風の帽子をかぶったオーストラ
リア兵と声を交わす詰め襟姿の若者が
いる。

昭和21年3月に米軍により撮影され



引き揚げの記憶

に。命を運ぶ港丸。左
濱川には、横氷川に運ば
る念館奇示フさ
もる念館奇示フ
在れ記の船が上
(左)現さの物語
係留部この物に
内この物語に映
の黒い服

たカラーフィルムの一コマに映ってい
るのは、学生だった錦本博さん(81歳
岩国市)。錦本さんは、当時半年く
らいの間、援護局で働いていた。駐留
軍立ち会いのもと引き揚げ者の数を数
える仕事をしていた。外国人と話がし
てみたかったという好奇心も手伝って
しばらくの間勤めたという。

60年の歳月を経たこのフィルムには、
沖に浮かぶ軍艦『八雲』や空母『葛城』
の姿も収められている。このフィルム
は、11月のメモリアルイベント(13ペー
ジ)で上映される予定になっている。

船酔いから解放され、 甲板で心地よい風に 身をさらしました。

台湾から引き揚げた一家の物語。



鍋谷朝子さんは、台湾での生活、引き揚げの様子を手記につづてくれた。

「**ひ** どの船酔いに悩まされました」と鍋谷朝子さん（71歳 大野町）は、帰国の船で味わったつらい思い出を語ってくれた。

台湾で生まれた鍋谷さんは、4人きょうだいの2番目。父親は双三郡吉舎町（現三次市）出身で、昭和の初めに台湾に渡り、警察官をしていた。

当時、国民学校5年生だった鍋谷さんは、8月15日の終戦を台湾の新竹付近の稲粟という地で迎えた。そのときの気持ちを「空襲におびえなくてよかった安堵感と解放感は感じたものの、日本が負けた、ということはということなのか、わからなかった」と手記に書きつづる。夏が終わり、やがて台

湾人学校に移った鍋谷さんは、様変わりした授業内容にとまどいを覚えながら北京語を習った。

その年の暮れ、日本に帰還できるという情報が入った。しかし日本に持ち帰れるのは、1人夏・冬3着の衣服とわずかばかりの家財道具、寝具のみという条件だった。

3月になり、いよいよ帰国するときになると、親しかった台湾の人が荷造りを手伝ってくれ、駅まで見送ってくれた。暗い貨物列車に押し込められ、家族が抱き合うようにして数時間揺られ、台湾北部の基隆（キールン）港に到着した。

乗

乗り込んだ船は貨物船。「暗い船底への階段を一段一段踏みしめながら降りた」と回想する。船底は人と荷物であふれ、座るだけで精一杯、横になることもできなかった。3日の船旅の間、父親と姉を除く家族は、船酔いに苦しめられたという。

大竹沖に船が着いたのが3月末のこと。船酔いから解放され、甲板で心地よい風に身をさらし、周囲の景色を見渡した。しかし上陸手続きができていないなどの理由で、沖合いに10日間もとどめられたということだ。目の前に祖国の地を見ながらの足止めは、長く待ちどおしかったことだろう。

上陸後は一列に並ばされ、髪の毛が真っ白くなるほどのノミやシラミを退治する殺虫剤DDTの洗礼。収容施設



（左）長門市仙崎港の一角にある引き揚げ地。仙崎には41万3千人が上陸した。また朝鮮半島に帰る約34万人を送り出した。（右）「岸壁の母」で有名な舞鶴港。最も長い13年もの期間引き揚げ港としての役目を果たした。66万人余りの引き揚げ者と1万6千余りの遺骨が戻ってきた。

に入り、3日くらい滞在したような気がする。鍋中さんは記憶の糸をたどる。
父親の郷里に帰った家族6人。苦勞を重ねて過酷な戦後を生き抜き、子どもたちを育ててくれた両親。その母親が米寿を迎えたときにぽつりとこぼした「引き揚げ者ということで随分悲しいこと、つらいことあっただろうね。すまなかったね」という言葉に、鍋中さんは涙を止めることができなかった。

65年ぶりに ふるさとの地に帰る。

シベリア抑留、
元日本兵宮本良一さん
無言の帰郷。



「お兄さんお帰りなさい」そう語りかける宮本さん。

6月24日、防鹿集会所には、黒い喪服を着た宮本壽人さん（76歳 防鹿）とその親族が集まった。

この日、壽人さんの兄、宮本良一さんの遺骨が、65年の歳月を経てふるさとの地に帰って来るのを迎えるためだ。良一さんは終戦後、シベリアで抑留され、24歳という若さで亡くなった。

平成12年、厚生労働省の遺骨収集団がシベリア、バイカル湖付近のウランウデ収容所を訪れ、43柱の遺骨を持ち帰った。抑留者名簿と埋葬状況を確認し、DNA鑑定の結果、宮本良一さんであることが確定した。

遺族らが見守る中、遺骨伝達式がおごそかに行われ、広島県援護恩給室の小川猛央室長が「戦後60周年という年に、ふるさと大竹に帰られた。やすらかに休みたい。謹んで御霊のごめい福をお祈りします」と遺骨を手渡した。

良一さんは、大正11年生まれ。昭和15年暮れ、19歳で出征した。壽人さんが6年生のときだった。

陸軍野砲兵第39連隊の伍長で、昭和20年春の「支那（中国）から満州に転戦する。日本が近くなっているらしい」という便りが、最後となった。

平成2年、収容所で一緒に過ごした戦友が訪ねて来て、良一さんの最期を伝えてくれた。材木を運ぶ作業をしていた良一さんは高熱を出し、注射を打ったがかえって悪化した。死の間際、「お母さんがもちを突いて持ってくる

から、みんなに分けて」と、うわ言を発していたそうだ。そして昭和21年3月11日、良一さんは短い生涯を閉じた。

「感無量です」。遺骨を前に、壽人さんは、時おり目を潤ませる。「元気で面白い兄でした。長距離の選手をやっていました」と良一さんのありし日の姿を思い浮かべる。

「戦後60年の節目にわが家に帰って来たということは、喜ばしいこと。これから一生懸命拜んでやりたいです」。そう軍服姿の遺影にしみじみと語りかける壽人さんだった。

知られざる「あの日」。 地域で原爆の話を語る。

8月21日、元2ネットサルビア会が主催する「ふれあい食事会」で、戦後60周年を記念した講演会が行われた。会場の元町2丁目公民館には、地域の子どもからお年寄りまで多くの人が集まった。

講演会では、地元に住む加藤辰夫さん（88歳 元町2）が、原爆が投下された日の出来事を語った。その日は元町から広島に建物疎開に動員された多くの人が被爆した。その救援活動のことなど、実体験を通した、知られざる「あの日」の話に参加者は耳を傾けた。

話に聴き入る人たちの中には、あまりにも悲惨な当時の状況に悲痛な表情を浮かべる人もいた。

講演を聴いた村本紗和子さん（大竹小6年）は「戦争は怖いと思った。二度と戦争をしてはいけないという思いや戦争の悲惨さを語り継いでいく必要があると感じました」と話してくれた。



数十人を前に、被爆の惨状を語る加藤さん。



小川県援護恩給室長から宮本さんに遺骨が手渡された。

歳月を越え、 今に伝える物語。

無言の帰還、被爆の実相、そして祈念事業へと…。

記憶
60年目の



戦後60周年を迎えた今年、さまざまな出来事があった。
シベリア抑留の過酷な環境の中、力尽き倒れた人の遺骨が、ふるさとに戻ってきた。被爆の実相を地域に伝えようとした地域での取り組みや原爆展の開催。そして60周年平和祈念事業として8月5日に行われた「平和を願うタへの集い」など、数々の動きがあった。



シベリアからの引き揚げ者を多数受け入れた舞鶴港にある記念館には、その過酷な収容生活が展示されてある。(舞鶴引揚記念館展示)

海外引き揚げ、海兵団、潜水学校、国民義勇隊の記憶を伝える

戦後60 おおたけメモリアルイベント

11月26日(土)

10時～16時 総合市民会館



大竹市には、戦前、海兵団・潜水学校がありました。戦時下においては、国民義勇隊約1,000人の市民が原爆被害に遭いました。また、戦後は海外から41万人の方がたが大竹港に引き揚げられました。戦後60年の節目にあたる今年、戦争の悲惨さ、平和の尊さを後世に伝えるために「戦後60おおたけメモリアルイベント」を開催します。

〈第1部〉10時～11時30分 「戦争の記憶」

- 語り部講演（海兵団、海外引き揚げ、被爆者協議会）
- 当時の写真やフィルムの上映

11時30分～13時 「郷土料理を味わう」(昼食)

〈第2部〉13時～16時 「記憶の地を訪ねて」

- 船・バスにより、引き揚げ桟橋、海兵団跡地、潜水学校探知講堂などを巡るツアー

- 参加料 ●第1部・第2部参加者…1,000円
●第1部のみ参加者 …… 300円

申し込み

11月4日(金)から電話(☎535800)、ファクス(FAX 535801)
または直接、戦後60周年平和祈念事業実行委員会（総合市民会館 生涯学習課内）に申し込んでください。参加人数に限りがありますので、早めにお申し込みください。

記憶を伝える写真展

と き 11月22日(火)～27日(日)10時～17時
(11月23日(水)は休館日)

ところ ギャラリーおおたけ（市立図書館2階）

内 容 当時の写真と資料展示・フィルムの上映

取材手帳

学生時代、クラスメートがもらした「うちの親父は大竹に引き揚げて来たんだ」の一言が、今も耳に残っている。そのときは、東京出身の彼から大竹の名前が出てくることの意外さと同時に、初めて大竹という地が歴史の舞台となっていたことを実感した。▼今回、60周年平和祈念事業実行委員会の人たちと共に、戦時中、戦後のことを知る人の話を聞くことができた。60年以上も前のことなのに、昨日のこのように語ってくれる姿に、そのときに体験したこと重みを感じずにはいられない。▼大竹の町の基盤整備も旧海軍の力でされていたことを知るにつけ驚いた。ただそれらは住民のためを思い、行われたことではなく、あくまで戦争を遂行するための手段であったのも事実だ。▼しかしこれらのことは、やがてそのことを知る人たちがいなくなれば、記憶から消え去っていつてしまっただろう。その記憶を記録し、後世に伝えようと実行委員の皆さんは、数カ月間奔走している。▼そして厳しい予算の中で広報紙を発行している全国の自治体の広報担当者、他県、他市の証言・資料募集記事にもかかわらずスペースを割いて、掲載してくれたことを感謝するものである。(Y・O)

寄せられた手記・手紙。
「戦争は百害あって一利なしの言葉が印象的だった。」



戦後60周年平和祈念事業実行委員会。公募による20代から80代までの幅広い層の市民ボランティアの皆さんの取り組みは、11月26日の『メモリアルイベント』実施に向けて、追いつみ段階に入ってきている。18回目の集まりとなるこの夜の実行委員会でも、ポスター、チラシのデザイン、マスコミへのPRのことなどで、活発な意見が飛び交う。

寄せられた証言、手記

戦前の海軍施設や戦後の引き揚げ港としての歴史がある大竹。しかし戦後60年を経るまで、これらの歴史を検証し、残そうという市としての本格的な取り組みがされてきていなかったのも事実だ。市史編さんや写真集編さんといった中で、その記録を残し、また個人やグループでの資料収集がなされてきてはいるが、市民や関係者を巻き込んだの大きな取り組みは、初めてののことかもしれない。

実行委員の皆さんも、同じ引き揚げ港としての歴史を持つ山口県長門市を訪問し、戦後50周年時に行った催しの話を聞きに行ったり、個人で舞鶴港、横浜港、国立国会図書館まで足を伸ばしたりと、その熱意には驚かされる。

また、新聞やテレビ、全国各地の広報紙の協力で、情報収集を呼びかけたところ証言や手記、貴重な品々が生涯学習課にある事務局に寄せられた。

戦争のことを語り継ぐ場をつくることが、私たちの務め。

メモリアルイベントに向けて、実行委員会は…。

60年目の
記憶



われる80代と50前後くらいの親子連れに海兵団跡地のことを聞かれました。しかしそのときは、記念碑のことも知らず、案内することができませんでした。大竹にいながらそのことを十分に説明できなかったことが残念で、その人たちに對して申しわけない思いがありました」。そんな体験が実行委員会へ加わった大きな動機だという。

岩部守邦さん(83歳 新町1)は、被爆者協議会の活動で、これまでも原爆の惨状、核兵器廃絶を訴え続けてきた。しかし戦後60年の今年は『原爆展』開催など、より積極的な動きを展開し、実行委員としても事業推進の大きな力となっている。『メモリアルイベント』でも原爆の犠牲となった国民義勇隊の話をする予定になっている。

記憶から記録に

たかだか60年、されど60年。その痕跡が後世に残らないという可能性も十分にあった。今回実行委員としてかわることで、その姿が見えてきたと一同声をそろえる。

過去を知る人々を訪ね、証言を聞く中で「60年間、戦争時の話をしたことがなかった。また、そういう機会もなかったと話されることに驚いた」。そう実行委員の一人はもらす。確かに思いつくすのもつらかったことに違いない。しかし戦争のことを伝えていく場をつくっていく、それらの記憶を記録へと

残していくことも私たちの世代の務めだと痛感したという。

「貴重な体験ができました」という清光慶さん(31歳 新町2)の言葉に表されるように、この事業にかかわった一人ひとりの心の中に、大竹の歴史や人々の言葉が刻み込まれた。そしてそれは次なる世代へと伝えていく使命の芽生えとなるのではないだろうか。



(右)実行委員会は、夜のふけるのも忘れ熱心な意見を交わす。
(左)海兵団、引き揚げ港の歴史を知る人にも話を聞いた。左から岡野正昭さん(黒川2) 高林宏明さん(白石2) 吉岡美俊さん(西栄3) 中本智幸さん(白石1)

説明できず申しわけない思い

実行委員の一人、上村徹治さん(55

歳 西栄3)は、この事業にかかわる

きっかけを話してくれた。

「昨年(2014年)の今ごろ、遠くから来たと思